

### \*祈っても応えられないと感じる時

私たちは、祈っても答えがないと感じる時、あまり祈らなくなってしまいうということはないだろうか。祈る前からあきらめている、ということがあるかもしれない。しかし、祈りは、生ける神様との生きた人格的な会話である。自分が「祈りの答えがない」と勝手に感じているだけで、主なる神様は、はっきりと答えているのに気付かないだけかもしれない。

今日は、使徒パウロが、コリントの諸教会に宛てた手紙の中から、祈り求めてもその通りに実現しない、と感じる時、私たちはどう受け止めたらいいのか求めてみたい。

### \*肉体に一つのとげが与えられたパウロ

7 節「その啓示」の内容は、手紙を記す 14 年前、パウロが、第三の天、または、パラダイス、と言われるところに引き上げられた体験だ。パウロにとっては、個人の主観的な体験だが、確かに経験した事実である。事実なら誰に証ししても構わないし、堂々と声高に証言しても良いはずだ。しかし、パウロが高慢にならないように、肉体に一つのとげが与えられたと言う。ここで言う「肉体のとげ」とは、健康面の不安や弱さ、具体的な病気などが考えられるがはっきりしない。パウロにとって、福音を証しするのに、差し障りがあるような問題だったのだろう。

### \*とげを去らせてほしいと三度主に願うパウロ

パウロは、この試練をはじめから受け入れていたわけではない。

8 節「この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。」「とげ」が抜け落ち、苦しい病から解放されるように、パウロは祈った。もしかしたら、三度の願い求めは、一度ごとに断食して、長い時間かけて、何日もかけて必死に祈り求めたことを含むかもしれない。主イエス様のゲッセマネの祈りにも通じるだろう。主イエス様は「この杯（十字架刑）を過ぎ去らせて下さい」と必死に祈られたが、父の御心は、主を十字架に向かわせることであった。ついに、主イエス様は「御心が成りますように」と応答するに至った。

### \*神の恵みを十分頂いている

パウロの場合は、どうだろうか？ 9 節「しかし主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」パウロは祈りの中で、主の応えを聞いた。それは、肉体のとげ、つまり病などをいやすとすることではなかった。「キリストの力が私をおおうために」とは、キリストの力が「自分の内側に住む」「自分に宿る」という、主イエス・キリストとの結合を意味する。

10 節「ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいきます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」パウロは福音宣教の妨げになることを上げている。しかし、内に宿るキリストの御力のゆえに、パウロは喜んで、と言い切った。なぜなら、弱い時にこそ、その弱さにキリストの絶大なる御力が、強く働いているからだ。

### \*キリストの力が宿っていることを証しする自分の弱さ

では、私に（私たち一人ひとりに）与えられている「とげ」、弱さ、困難、苦悩、侮辱は何だろうか？ 自分にとって、マイナスに思えることが、キリストにあって、プラスに変わるのだ。主はパウロに、「わたしの恵みはあなたに十分ではないか！」「十分与え続けているではないか！」と答えたように、あなたにも語り掛けて下さるだろう。